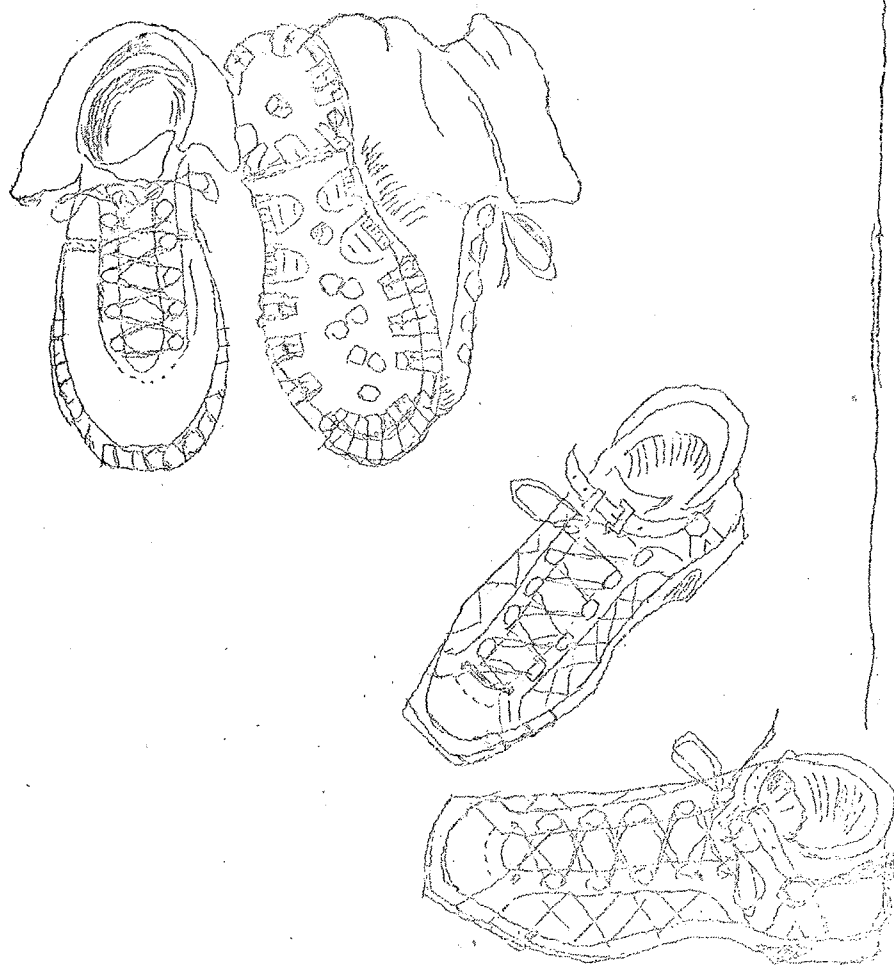


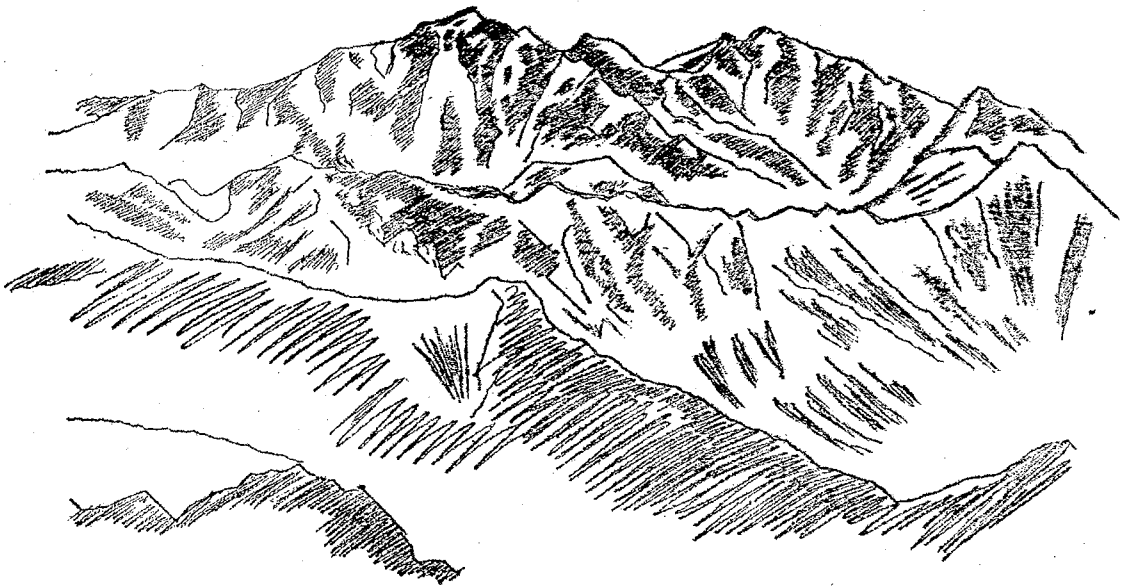
仿復 XV



都立西高等学校出版部

目次

1	歡迎會報告	京田	(2)
2	勤七沢報告	北村	(3)
3	香山偵察報告	松田	(4)
4	夏山縱走報告	北村	(5)
5	洞沢合宿報告	高小松田	(9)
	夏山縱走圖		(12)
	行動表		(13)
6	夏山雜感	田中(夫)	(14)
7	ゴシップ		(15)
8	夏山才力	北村	(16)
9	川苔集中報告		(18)
	滝谷	松田	
	瀧上谷	北村	
	倉沢地谷	京田	
	逆川谷	田邊	
	川苔集中圖		(17)
10	終集後記		(20)



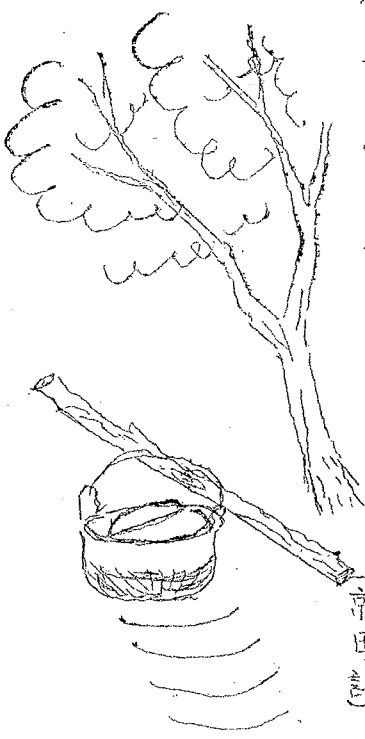
木曾駒ヶ岳より空木岳(左)と
南駒ヶ岳を望む

新入生歓迎会報告

五月七日 新入生を山に親しませしむる事を目的とする
 立川 七時五分集合
 京田 松田 高山 北村 田辺 田中 昇
 新入生 小谷 野山 岸 成城
 他 O.B. 越沢 バツトレス 二十名
 鳩の巣 日の出山 日向 和田 御蒸

山岳部十周年記念といふので又とない盛大な
 山行。越天を見下して一汗かく頃より、新緑に美
 ラストが相当離れ、パレムが二に分れて天に
 下。ゴルの少々で全員合流。早速新緑の
 カマド作りと現役が忙かしくなる。今年も得た配
 意と指揮のおかげで意外早く出来上ったが、質
 量と量とを兼ねる事が難しかった。三杯出来上った
 るが、此が後短程事を起す原因ともなつたのであ
 るが、例へば如く自己紹介より始まつて、コンパを始
 め、例へば如く自己紹介より始まつて、コンパを始
 次々に飛出さすに急ぎにして和やかな愉快な雰
 囲気が出来上り、代読部、山岳部十周年の為、
 文部大臣の御賞状の代読部、山岳部十周年の為、
 全く珍重されておられた。その外は皆部の説明専
 一くさりあり、最後に楽しく歌を歌つておしまひ、
 時間都合で此処から帰る人もあり、

我々は後片づけをしてとうとう鍋一つあまつたし
 る。二を今のまま一年生がかつて右岸を登る。バ
 トレスの所でバツトレスを見下ろすと、大塚の
 合流、苦勞してかつたが、上げた才粉を困んで大其し
 て、ひる内けさかつたが、大塚山の午前の道の真
 は、適当で急品神社まで行き、空腹が怪しかつた
 が、日ノ出の適当な駅に下ると、雨に降り出して
 現役連は景気よく走つて、日ノ出に降り出して、
 頂上には雨がかやまき、頂上では雨も強かつた。
 煙に下る粟もあつたが、そのうち、内戸川ハリの眺
 望を楽しみつつ、電車賃を繰り出す。三空山から
 下つて日ノ出へ出た。一年生は途中で中食の景
 あまり食欲がたい。初なるので心配したが、元氣よく
 歩いた。初年が如く自由な気分を終止した。山の
 部長問及で先輩との親密感を少し、新入生も山の
 楽しさをよく理解してくれた事と思ふ。
 京田記



行動報告

目的 新入生三岩場にならぶ事
期日 六月十二日〜十三日
×六ノ一 松田北村高山富山小谷野黒沢山岸
廣野沢田 福田さん

丹沢勘七沢

六月十二日 天気が曇り雨
天一通ゆった雨雲にふりあれた天気が下
い四時半淡沢に出発一年をけの四時程の荷を
大半一時間歩いた頃より歩いた頃より降りの荷
してきたがそのまゝと歩いた頃より降りの荷
で二俵小屋に着いた一年をけの四時程の荷を
様子としていなり飯をたいていり頃より降りの荷
降るとり全員の命令に火をくさるより食後
松田の持つてきた菓子や火をくさるより食後
五月十三日 晴れ時々曇り
五時に起り着いて七時に食後八時に着き行際
員ラジカと七時に着いた後十時に着き行際
五登つて次々と現われ着いた後十時に着き行際
くがてFは段の境に着いた後十時に着き行際
トバの松田は八段の境に着いた後十時に着き行際
トカのおの松田は八段の境に着いた後十時に着き行際
捲かえりいるので残りの半分の人は近ごろ高
くかえりいるので残りの半分の人は近ごろ高

五時に起り着いて七時に食後八時に着き行際
員ラジカと七時に着いた後十時に着き行際
五登つて次々と現われ着いた後十時に着き行際
くがてFは段の境に着いた後十時に着き行際
トバの松田は八段の境に着いた後十時に着き行際
トカのおの松田は八段の境に着いた後十時に着き行際
捲かえりいるので残りの半分の人は近ごろ高

入りてたらく傾斜も急に上がった天気も晴れ
見せてワカへ方の正午頃にすく登った
に塔が岳へ方のはかん頂上に着く新しい
建つていた日かすの照りかげもあまらな
今年水場の水がすく向に來るのをまづた
周回の見望の石の跡も向に來るのをまづた
十分歩いた頃野さんといふ田舎人に合は
雨と林道に出たので流すには直にす
合うため速足で流すには直にす
オワリ

タイム
六月十一日
十五〇五分 新宿発
十六十六分 沢着
十八十四分 俵小屋
六月十二日
五時起床 七時出発 八時通過 八時
二十分 着 九時着 十時着 十一時着
三十分 塔が 五分 登 十分 登
塔が 五分 登 十分 登 十分 登
十五分 無林道入り 十八時十分 沢着
着十五分 無林道入り 十八時十分 沢着
宿着解散

(北相記)

夏山合宿 (北ア針木より沼沢)

目的 従走により新人の体力養成

期日 七月三十日〜八月七日九日間

ナンバ― 山松田田辺北村高山以上正部員

小谷野黒沢石垣山岸
コナ― 田中奥氏

行動報告

七月二十八日 晴れ (新宿―松本)

先発(田中さん、北村、小谷野) 新宿発最終で出発。

七月二十九日

先発隊の者、松本警察署先生宅におちつさ先生夫妻の招待を受けました。入を遠望し、浅間温泉に翌夜松本抵をながめていた頃東京の本隊員はぞくぞくと新宿に集合し始めました。先発同様の見送りを受けたらしい。後は松本にいたるまで詳細は知りません。

七月三十日 快晴朝は曇つていたが (大沢君)

五時過ぎ先発本隊合流臨時五三〇列車で松本を離れる。天気はだんだん快晴へと変わって行く。大町着後二十分バスにゆられて大出に着く。茶屋で朝食。食いよいよ合宿第一歩を踏み出さず平均七貫近い日がカンカン照りつづき、なと、おし、た様な顔で、ワウの多歩りてりる。砂ぼこりが出た汗は、はら、はら流、れ、あ、ご、から首を通り腹を通り、ズボンにす、い、込、ま、れ、て、行、く、ヤ、ツ、と、籠、川、と、平、行、な、道、へ、出、た、休、む、た、が、に、河、ま、で、よ、は、た、ま、り、て、行、き、川、岸、に、パ、ン、タ、と、座、り、と、ん、で、が、ぶ、く、と、汗、と、な、つ、下、央、の、水、を、

合を取りもどし、そのままとして、何かを凝視する。日沢の出合を少し越した二段の煙堤の所で、昼食をたべる。田辺君はここを着くと同時に急に烈しい腹痛のため、メシも食わず横になつたまま、てり、時々は、りて、りる、り、で、出、発、を、見、合、せ、り、た、が、一、間、で、協議の結果、田中さんと僕が田辺君についで、り、松田以下残りの者は予定通り大沢小やへ出発する。あとに残つた者は、もう少し田辺君の様子を見て、松田の後をおうか、大町へ下るかを決めると、なつて、り、る。三時近く、なつても、何の、変化、も、な、く、田、辺、君、が、初、歩、を、一、り、り、と、奥、の、ド、田、辺、君、を、つ、水、で、下、し、翌、日、本、隊、へ、追、いつ、く、予、定、で、僕、は、本、隊、へ、追、いつ、く、為、に、定、さんと、沼、水、大、沢、へ、向、つ、て、出、発、し、た。

僕は十時を越した、ガツク、な、り、で、の、ろ、ろ、と、歩、き、は、め、た、や、が、木、々、の、お、り、茂、つ、た、薄、暗、い、山、道、を、心、ぼ、や、く、休、み、く、歩、り、て、り、た、が、六、時、半、に、な、つ、て、も、松、田、君、が、こ、な、い、り、で、今、日、は、こ、な、い、な、と、思、い、が、か、り、し、て、し、き、な、た。や、ツ、と、肩、決、に、出、た、丸、木、輪、を、渡、る、の、は、や、な、り、で、下、流、を、渡、渉、し、た、日、も、暮、ち、て、り、る、り、で、一、層、暗、い、道、を、ラ、イ、ト、を、出、し、て、歩、き、つ、つ、か、け、た、が、七、時、に、な、つ、た、り、で、ま、う、そ、り、く、オ、カ、ン、に、し、よ、う、と、電、燈、で、あ、たり、を、物、色、し、な、が、り、進、ん、で、い、く、と、背、り、高、い、竹、り、よ、う、な、上、り、方、は、草、の、葉、の、よ、う、な、植、物、の、は、え、て、り、る、所、を、見、つ、け、さ、つ、そ、く、ガ、ツ、ク、を、下、し、て、オ、カ、ン、の、用、意、を、は、い、め、た、所、へ、ど、か、お、か、六、七、人、の、パ、ー、ティ、ー、が、下、り、て、き、た、大、沢、小、や、は、と、き、く、と、二、十、分、で、下、り、て、き、た、と、い、う、そ、こ、で、シ、ー、ト、と、毛、布、を、テ、ン、ト、ガ、ツ、ク、に、入、れ、て、荷、物、を、持、つ、て、行、く、の、は、大、変、な、り、で、ウ、ケ、ワ、と、手、ぬ、ぐ、い、を、肩、こ、ら、し、し、て、小、や、へ、向、つ、た、が、道、を、さ、る、さ、つ、て、

とこここと種々のテントが張られてゐる我々も

仲向入りして小川の近くにもンアする。

八月三日 晴れ

四時全員起床合宿王始めてから二千メートル以

上の高い所へ眠ったのは今日始めてであるので

よく眼れなかつた。朝食後縦走路へと直達中を野

ウケギを見つけた。直ちに捕えググにしよう見はら

いのまく縦走路からひりかえると登山剣術の山

々が見える。今日はひとく熱く歩くとはからうほ

こりに暑さにあてられ、たると下りたりしてゐる

ちにくになつてスッパに着く道の中には半

覺程の池がある。カバのオたのが多く浮いてゐる

ここを通る人はたいてり少しいこの上の雪射りで

ホナアするらしい。麦茶の様な水で麦茶をたくさ

つくる。松田は五色でつかまえたウサギを調理し

てゐる。食後丸焼すのウサギの肉を食う。スゴの

小屋は老朽でもうあるまいよ。たが肉から見える

とまはニミ年ほもつ。

八月三日 晴れ

三時半全員起床他のグがた雷雨(スゴ)太脚

バツキンググその他を行ハ出登朝つゆにスポンを

めらしながら急坂道をシグググに登り雪渓に出た

今日の朝は急坂道をシグググに登り雪渓に出た

の上を渡り歩いた。坂が攻めはじめた。ゴロくした岩

けりて後始末歩いた。坂が攻めはじめた。ゴロくした岩

下り始めると少く歩いた。坂が攻めはじめた。ゴロくした岩

下り始めると少く歩いた。坂が攻めはじめた。ゴロくした岩

下り始めると少く歩いた。坂が攻めはじめた。ゴロくした岩

下り始めると少く歩いた。坂が攻めはじめた。ゴロくした岩

下り始めると少く歩いた。坂が攻めはじめた。ゴロくした岩

下り始めると少く歩いた。坂が攻めはじめた。ゴロくした岩

下り始めると少く歩いた。坂が攻めはじめた。ゴロくした岩

下り始めると少く歩いた。坂が攻めはじめた。ゴロくした岩

下り始めると少く歩いた。坂が攻めはじめた。ゴロくした岩

下り始めると少く歩いた。坂が攻めはじめた。ゴロくした岩

下り始めると少く歩いた。坂が攻めはじめた。ゴロくした岩

下り始めると少く歩いた。坂が攻めはじめた。ゴロくした岩

下り始めると少く歩いた。坂が攻めはじめた。ゴロくした岩

下り始めると少く歩いた。坂が攻めはじめた。ゴロくした岩

下り始めると少く歩いた。坂が攻めはじめた。ゴロくした岩

下り始めると少く歩いた。坂が攻めはじめた。ゴロくした岩

下り始めると少く歩いた。坂が攻めはじめた。ゴロくした岩

下り始めると少く歩いた。坂が攻めはじめた。ゴロくした岩

下り始めると少く歩いた。坂が攻めはじめた。ゴロくした岩

下り始めると少く歩いた。坂が攻めはじめた。ゴロくした岩

八月四日 晴れ

今日からはりまつて二時半には全員起床目までこすり

あからメシを食ひ。四時半に出た。今日の行程

つる。望する。りかえりた。上)岳頂上で今日の行程

日にまらぬ。りかえりた。上)岳頂上で今日の行程

部のカタに着いた。よく歩きかんとは。今日

しあふ。りかえりた。上)岳頂上で今日の行程

しあふ。りかえりた。上)岳頂上で今日の行程

しあふ。りかえりた。上)岳頂上で今日の行程

しあふ。りかえりた。上)岳頂上で今日の行程

しあふ。りかえりた。上)岳頂上で今日の行程

しあふ。りかえりた。上)岳頂上で今日の行程

しあふ。りかえりた。上)岳頂上で今日の行程

しあふ。りかえりた。上)岳頂上で今日の行程

8 早くねて早心ちする予定で食後すぐ眠りに着く。

八月五日 朝少し雨のうち晴れ (黒部・双六池)

はりまの非常にさむく寒とテナト王往復するのにも
 乗じやなり風が強く火つまか悪いままを炊き終
 り増の汁を作つてはいる時雨かほら (降つてま
 り三時全員ヤシを食う雨がやまぬいのも又わ
 り込む事に決定し又毛布にもぐり込もうと煙後起
 りたのかなか七時過つてあつたすべし雨はや
 ろろあり空腹を感じ昼食を取る九時出発急な登
 りに一気に登り切つて遠松帯に出た三時間たら
 くし遠道を登つて三侯連華の頂に立つ硫黄赤
 赤岳が目の前に明日登る稜も近くに見るよと
 出禾た途中マキを取らぬからも一時止んで双六
 池に近づくとついで池のまたたけの音がわか
 ってきた水面に近づいて浅い水底をみるとま
 ぶや梅千のたの等が深山泥んでいる。立札には遠
 松を切つてはいけなかと注意してある。おりの運
 んで来たマキはメシたきかお茶を沸しても全
 員焚火にあたるだけ残つていた。今日も五時前に
 全員眠りに着く。

八月六日 早朝かすを共った強ソ且午後晴れ

食当(小鈴野・石垣)二時に起きる、かすかざかん
 に吹き上げてくる。三時全員起床、出発時ほびり
 うびりう小雨を突なつて吹きつけてきた。孫黄の
 によろ尻根を過ぎいよく西鎌尻根に出る。仙丈

決を見下し、かすかざかんをこけては北鎌尻根がうまほ
 んや見ええる所で昼食を取る。雨はやんでける
 が風はいせんと吹きつけている。槍ヶ岳か
 かにりほんやリを真近かに現わしてける。
 槍ヶ岳で一時間で行ける所まで来ていた。我々の
 合宿も千沢楽とつた。食後男んで合宿最後の
 登りを味わう。槍の頂上から時々登んたエールが聞
 える。晴れ向と見える槍肩につく。九割九分まで
 イキнгが羨であり、その中の半分以上が女性であ
 る。頂上を踏むとすべもどつて四十分。まぐらに糖
 ぞつた道をどんと下る。下るにしたがって響くや
 り全員顔がいくらかふくらむようた。途中ワ
 せかの蔭利氏に会い一時的にジャンとなり体面
 を保つ。尚とんかんで下り下つて四時間午午後二時
 横尾キヤンプ場にづく。疲れて動かない体を動かして
 テントを張り食後すぐ眠りに着く。

八月七日 朝より晴

一生涯四入高地での解散後バスで立つ。
 十日間女にした北アルプス中々ゆくり別水
 を告げようと思ふが難踏する上高地ではそんな
 な気がもなれなり。最終目的地東京へ気味あ
 せるが松本へつくと汽車は夜しかならので松
 本の町を見物に夕ラフク食べて長い街イヌメ
 シで荒された味覚をよびさます。
 列車は降りていたので無事新宿についた。
 ビンゴを引きく、コングリートの道を久とい
 りにふむ。

④ 視界が長尾は無用と總向小屋に急がうとする。根根田がジャンには行きたいと云い、根根田が積り、小屋で一休、マツチ附煙草を買って、サイテンを下りるが途中、マツチソレ一時同登す。

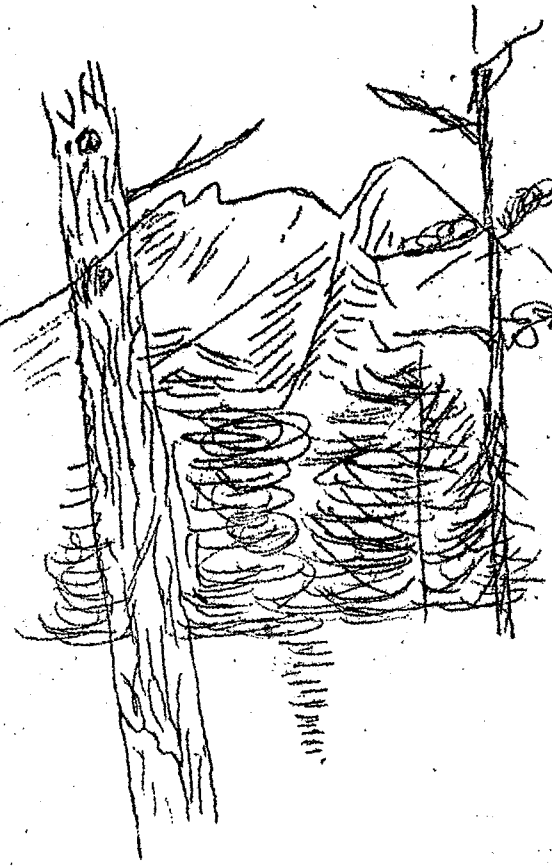
11日 08時 三峰のフエイス行福田、根根田、ジャン、高木と飛弾尾根行平沢、高山とサイテン、サイテンと二隊とする。

飛弾尾根

三峰隊出發後直ちに掛ける。サイテンを登ると遙か下方の雪溪上を連んでいる二人の姿が目にとまる。空はあくまで青く、登山者で、我々の向うには雄大な岩峰がそびえ立っている。奥穂高でスケッチをやり望遠鏡を借りて三峰の様子如何と見るが早くも二人は中程まで達して居る。途中ジャン登攀中、落ちたという名大山岳部員の搜索隊に出合、いやいや思いを味う。さてジャン頂上で一休止の後、いやいやとそろそろと下り踏跡に頼りつゝ、二股になった稜線をとらバースして下ると、覺しき所へ出る。昼食、さてサイルを取り出し平沢先登隊のいると、技術について一くさり御教授願ひ先ず平沢さんトツツで登攀開始。中々慎重な登り張りの。まことに結構な岩場で、中々楽しい。岩屋感もいんとある。T3 ↓ T2 ↓ T1 と存分練習した後はコンテ、ニマスでジャン頂上に出る。お互に無事喜ぶが、又かすか出て来たか、急いで帰途に向う。サイテンが又マキを取った後下りて行くと、小屋附近で三峰隊の出で、に会う。

12日 根根田食当を買って出る。

飯が炊けたら又寝てしまった。昨日飛弾尾根から取った岩膏をワカメのみ汁の中に入れてみる。一寸見ただけでは見当がつかぬ。今日は滝谷才五尾根に挑む日だ。汗だくで2ピッチで南峰上に出る。P1にまで行き、P2を南側に登き、P3の年前で北山稜にとルンゼを渡る。この山稜は北側が突にす。ぱりと切小傾斜も急で、リッパを通りに登る事は不可能。時には小オバハングを越すのに、吊上げを、行い中々興味がある。P1、P2の壁には足場少なく、微かな冒険を連ねられる箇所も少く、二時餘余りかけて登攀終了。かすが出て来る。北峰まで下り、かすが松田はサイテンを廻り、我々は南稜へと下る。今日は合宿最後の夜である。昨日集めた大量のマキで、大きなキャンプファイヤーで彩る。



8月11日(晴れ後がス)

三峰左イス 福田OB 松田

ザイル 30M ハンマー / ハーケン 6 (使用2)

カラビナ 4

タイム BC(06:15) - 右イス取附(07:45) - P3(10:05)

BC(11:50)

全く晴れわたったBCを後に三山の雪渓を登る。今日日本登高会ルートを経て三峰FACEを登るのだ。三四の雪渓はヤケに固い。もしやすくと石塗かも知れない。昨日見た紅い血は危い。変色してはえがたかっていた。あ、はなりたくな。取つきで一休む。もしもの時に備えキヤラメルを全部食べしてしまう。福田さんゴトゴトアーンガイレにして登りはじめたがとつきがはこりしないのではなはだ心細い。

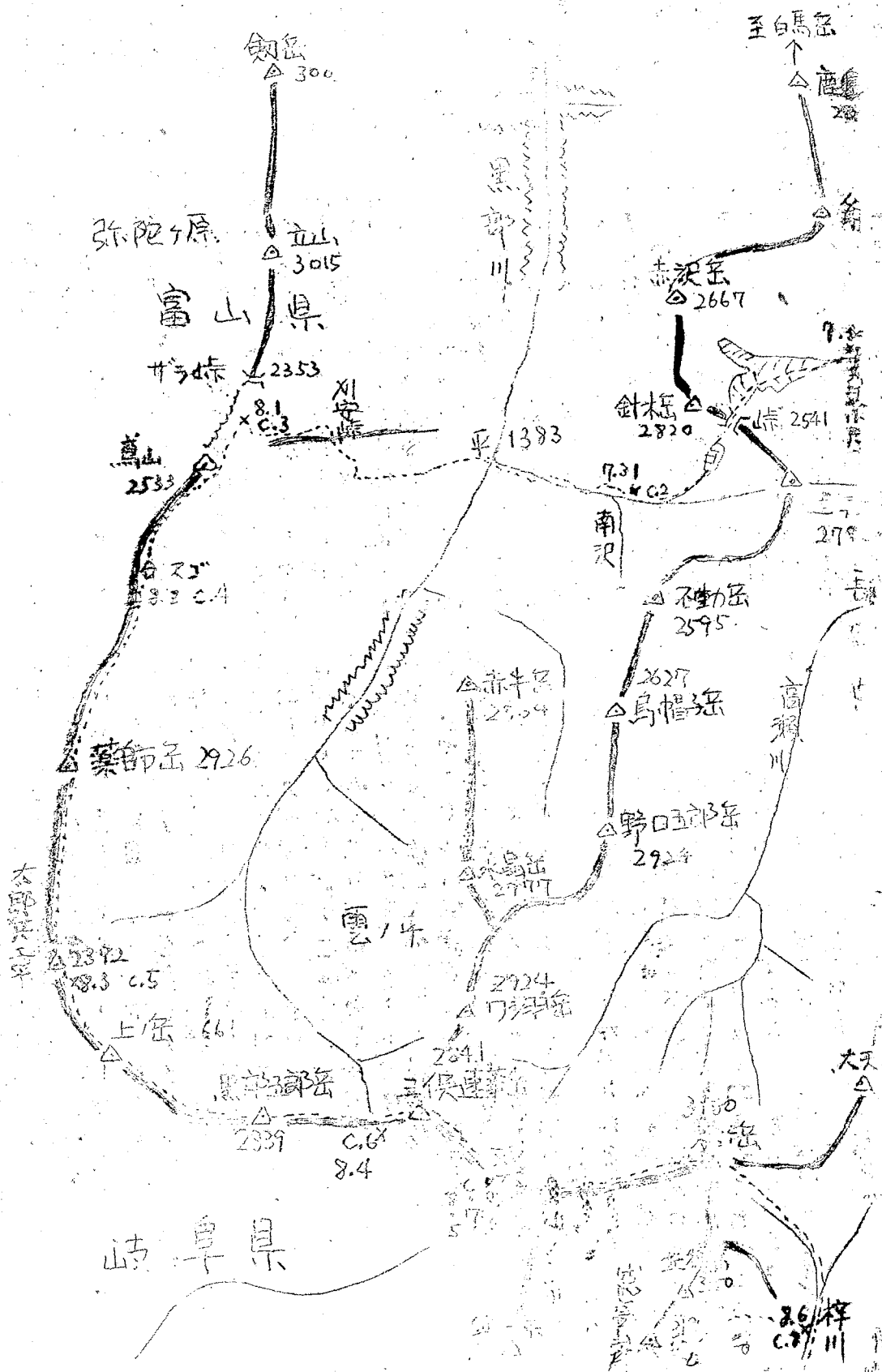
右にトラバースした所でオートバートハンギグ気味の所にハートケンをみつけ大いに勇気づけられ。又同じ称なトラバースを続けてガリト上端にズビツで到着。30M一杯は使ってガリト上端に達す。ハーケンを本を打ち、小オートバートハンギグを越える。後で聞く所は外れは此所は危い。背帯を用いて登るのだ。もうだが、福田さんは苦勞して直登。僕は右にまいたがセカンドはいい加減首が痛くなつた。この次のトラバースが最悪。我々は五十分で通過した称に思っていたが、奥穂から見ていたH氏の言によれば足を出したり動かしめたり30分位をタラしていたそうだが、このトラバースを終ったララで一休み、早急下山者もなめていた。五年は指をく

わえてクライマーを眺めていたんだがな。ソコからはいれた苦難もなくズビツで上部テラスに出るとニアスやシリソリなど適当に練習をやりながらP皿に立つ。福田さんと今日も又生きて居たと確信。時計を見るとまだ早い。今日も奥穂をまわって行きなかつたが、北尾根を下る。登るのと重い下りは急こう辛い。同じルートなのに人同様に変なものがた。雪渓上部でRCシルトをながめながらゴクゴクた。ひどいミカブラに悩まされながらガリヤードで三四のツルの雪渓を下る。夕食までたんまり時間があるのでゆくり時間をかけジャガイモのバター煎りを作る。すばらしくうまい。一隊はさほど疲れなかつたが精神的に疲れたりしい。ジョンガルム形驛尾根を登った平沢さんと高山のことがいやは気になる。打合せの四時になつて帰って来ない。急いで二人で夕食を食いサイテンを登りはじめたらリコク隣りに来た。

(松田)

8月13日 幼半月はわたって行かれた夏山合宿も今日で終りである。我々四人は六人分の食糧を食べつくし、元氣一坏橋尾に下山し、鎌倉に向う平沢・福田氏に別れ穂刈新道を高地に下山。荷物を持つ大のギスリニゲートにまよめ七十月ヤマヤク。真白はなつて高地から高々につく。松本で都筑先生に夕食をゴクソウはなり、ガライの臨時列車で夢をこぼして帰京。

(松田)



夏山縦走行動表

7月28日
先発(田中実氏、北村、小谷野)
23:55 出発
松本都筑先生宅にて一泊

7月29日
本隊(松田以下6名)
22:15 出発

7月30日 晴
松本駅で合流
5:30 臨時に上車
6:52 大町着
8:30 大発
11:00 黒沢通過
11:45 白沢合流
昼、水より1.5分
(A) 13:00 松田以下6名出発
15:35 扇谷合流通過
17:30 小屋の先2分の所にキャンプ
21:30 就寝

(B) 14:45 北村本隊を追ふ、
田中氏は田辺と安に下山
20:30 北村、大沢、小ヤより5分の所にピバーブ。

7月31日 晴
4:45 北村は本隊に着き連絡
8:40 出発
9:50 針ノ木雪溪で遊ぶ
10:50 発
12:20 昼食
13:26 田中実氏着
14:45 針ノ木峰着
16:30 針ノ木谷に入る。
17:55 テニト場着
21:00 就寝

8月1日 晴
4:30 食当起床
7:00 出発
7:25 南沢着
8:55 平着、橋を渡す
12:45 雁安着
15:05 五色着

8月2日
4:30 起床
6:00 出発
9:05 越中沢岳着
13:35 スゴ心着
18:30 就寝

8月3日
3:30 起床
4:30 出発
9:10 奈師糸頂上着
12:17 大郎小ヤ着
14:30 就寝

8月4日
2:30 起床
4:30 出発
8:15 大郎五部岳の肩に練習
10:45 大沢の谷に練習
12:45 テニト場着
18:00 就寝

8月5日
1:45 食当起床、朝食の後雨の
為、しばらくは茶をのみ
9:15 出発
11:00 三保蓮華岳頂上着
13:25 双六池着

8月6日
4:45 出発
6:45 千丈沢上着
9:10 槍の肩着、頂上入る。
10:00 槍の肩発
13:10 一の岳小ヤ着
14:20 横尾キャンプ場着
19:00 就寝

8月7日
7:00 起床
8:00 出発
9:20 徳沢園着
10:45 明神池着
11:20 河原着

今回も私か同行したわけであるが、この水は学
 校で命令であつて西高山岳部にとつてマイ
 ナスであつた。私は見逃がせまい。四季折々の山
 行に關しての旨会は適切な助言と指導を行つ
 と同行し、又自主活動をさせているのであるか
 ら、學校側の態度は非にうごなき。高年生の遭難
 に対し、この山が同行すれば火と夫々から「ん
 可受」に彼に旅をさせる親にしては、誠はたよ
 り有り難いである。と云つて今年、西高山は記録的
 には何事もない。しかし天候は悪まれりといふ事は
 山にありて第二の條件なりであるから、過大評価
 出しはしなす。山にあらざり。病人を救はなから
 ず、縦走又は定着の全計画を遂行出来た事は天候
 の事は二便の事である。病が高年生であつた。山
 は指導者と二人、指導者もなく北アルプスにゆく
 と、いふ事などは、おりそれた夢であつたのであ
 る。そして三峯スエス、遠谷などは勿論高嶺の
 花である。バウバウのムムバシツツで、奥縁父
 縦走を試み、凡雨の中で休息をさせ、足がつかせ
 て、倒れればと倒れる女をみても、まじまじとせ
 るを得るか、たのである。この向の進歩とは何
 であらうか。田中特利氏以下のた中まゆ情熱で
 ある。即ち西高山岳部における正統的登山が形
 作りれてきたのである。そういふ、反時かつてな
 い日どの華麗的な山行が計画され、成功して、事

して、正部員は正部員たるプライドも持たぬ。山に
 入り。これは心身両面の練磨によつて得たもので
 あつて、決して地位の意識ではない。体力忍耐、技術
 生活に關して下級部員の模範になり得るかといふ事
 も、老をよばなす。成功の連続は或る場合、無
 理による道理を生ずる。又部員制の甘受は進歩の
 停滞をみせるものである。部員会における紙上り
 採算が、にヒエ麗達を準部員にして、又正部員
 にして、も自分の実力以上のものを得ることには危険
 である。夏山からははずれるが、過日の集中に於け
 る、遠谷の転落、滝上の後退は、この水らの例にほが
 り有り。不足は資格以上にありである。
 縦走中、三の病を出した。幸、一人は初日であ
 り、一人は解散日近くであつた。た、支障なく終つた。が
 前者は縦走前、無理な富士登山がたつた。た、こは
 見逃がせまい。又、銀岳時間であるが、今回は三日目
 からの特に強調した事によつて、多くのパーテが出
 合つた。雨を全部回避して、水は、水に基因す
 る所が大きい。些細な手摺方は山にありて、指輪を
 水に事せあり、そうかといつて、水といつた、不注
 意を招く事もなく、全計画を終了出来た事は、何より
 であつて、そのリリーターシツツは、高く評価されよう。
 最後は一書を書いた。事は、つら、い事を買つて、出よ、
 として、更には、つら、い事を買つて、出よ、
 あり。

完



最初の日はよりにしていたが、
列しい腹痛のため、
量々の荷物を下し、
下山する。後を引受け、
たいただ一人で大沢に向った。
十五貫の荷物と空腹のため、
目的地数分前でオカシとなり、
けり

大天キヤンプサイトで大食の下が盆ごうが一
持ったなりので盛んにどなったが、結局自分が
なつた……ヤブへビの集束

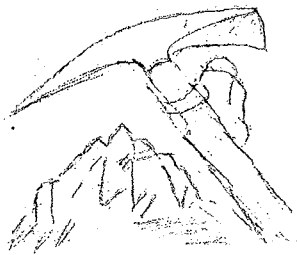
部内きつての山男である、
五色ヶ原を立てて、
まもなく山うさぎを発見する。ヤブヤブさず
目の遠くをへて本能を表し、
ナメク背で一発コ
ハリとまいうす。その後小屋に
つき皮をほぎ、
調理一切を引きうけた。かその
後は皮に油をぬつたり、
塩をかけた。さすたり、
なりたり、ハエの卵を見つげたり、
し夜食の仕事は一つまし
なかつた。

15
の体は大きいか、
気の小さ。一年の工。出発前夜
ハミ余り持た、
スリンドをななめ大きく、
精密検査に及び、
水筒のひまは、
いろいろな。

○食べる量と荷物の量とは
反比例する。とい
う新法則を身とま、
てうち立てた。か一年の工、
もつとも彼は吸収さ
ゆる食物の量との関係には、
小なかつた。

○いかなる故に
あらん。今年の毎日の
出発は、二時に
起き三時出発と
はい、二時に
起き三時に
なつても不思議
にありませぬ。

五色からスゴ小屋に
到つた。日小屋の前
に木立と坐して来た
一人の男、何と半日
余で来た所を二日
掛りで来たといふ。
うなるんだ。話。怖
り度くなった。か
此処まで来ては行
くも戻るも同じと
言ひ、後我々の後を
ノロノロと歩いて
来た。が太郎小屋
に到る日は豪雨に
あてらる。小荷を
えてしまった。



目的 夏山第一合宿不参加者に對しての一般指導
 期日 八月二十六日夜行で出發二十八日歸京
 場所 北村 京田 木下 小谷野 沢田

(行動報告)

八月二十六日 雨の中を新宿に九時集合。先輩
 導役多数の見送りを受けて勇んで出發する。コレ
 ほどトマ教あり。

八月二十七日 朝少し晴れた後すぐ雨となる。八
 ヶ岳の雄姿は裾野の一端小淵沢で小海線に乗り
 かえり朝食を食べながら空きの席に横になり、

懐かおかりの瞋眠をとる。のろいと唄いていた
 程の持合物でバスは梓山へ。晴れていた空も
 一瞬が小雨と化していた。四十分乗って梓山終

り降り薄着となつて雨の中を出發。三空沢の
 釜で昼食を食つていると急に雨が烈しくなつて

で胸は飯のつかえをま、あめて、出整。
 に入りそのまゝ進んだがすぐにむかつい

てし、荷を換えたりして歩いた。正午過ぎに
 十文字峠に着く。小さな新しいヒナン小屋があ

り案内所の大カンパンが立つていた。あちけ一
 面がスガカ、見透しは利かない。モラメルをほ

る、直ぐ歩き出す。一年生は快調、三年生は不調と
 いう所。大雨 白岩附近は露岩があり、岩の上

に立つとビュ〜と水をつける尻に体温を奪われる

、後で切つてヤッスを取り出して着用。以後

いコルの標本山頂にテントは楽に三つは張れそ
 うだ。しかし甲武信に迫ると決つていたので素直
 りする。四十分程で甲武信山頂。相不変展望は利か
 ない。急坂を十分程下ると左下に甲武信小屋が見
 えて来た。小屋には先客が六人程ストスを見
 ている。片側をあけてもらい、ケを脱ぎ全着換
 え、後ろまい肉のストとあちけの御飯で夜食。
 外は雨を激しさを増し、風も強くなった。思いつきの濡
 れたものを乾かしながらドラムカンのストにはあち
 る。先客の三人は立川高校の山岳部員であった。眠る時
 飯盒をかけた甲武信にしておいたのを覚えてもらい、どう
 もと感謝の意を表して、かまらぬ八時就寝。

八月二十八日 日中雨夕刻に至りやむ。
 雨の中を八時出發。木賊をまき登る。小屋に入るが

寒くて長居ができません。又歩きだす。西破川東破川と
 ドン、歩き土時すぎ雁坂峠に着いた。吹きつける

風をよけ、汗を拭き、靴を履き、カンをフルピスで流
 し込む。視界は吹上げるガスで利かず、膝をあげ記念

撮影の後、広瀬まで5kmの道を約二時間で馳せ下る
 。広瀬のガランとしたトロッコ道のそばのボロ小屋でカ

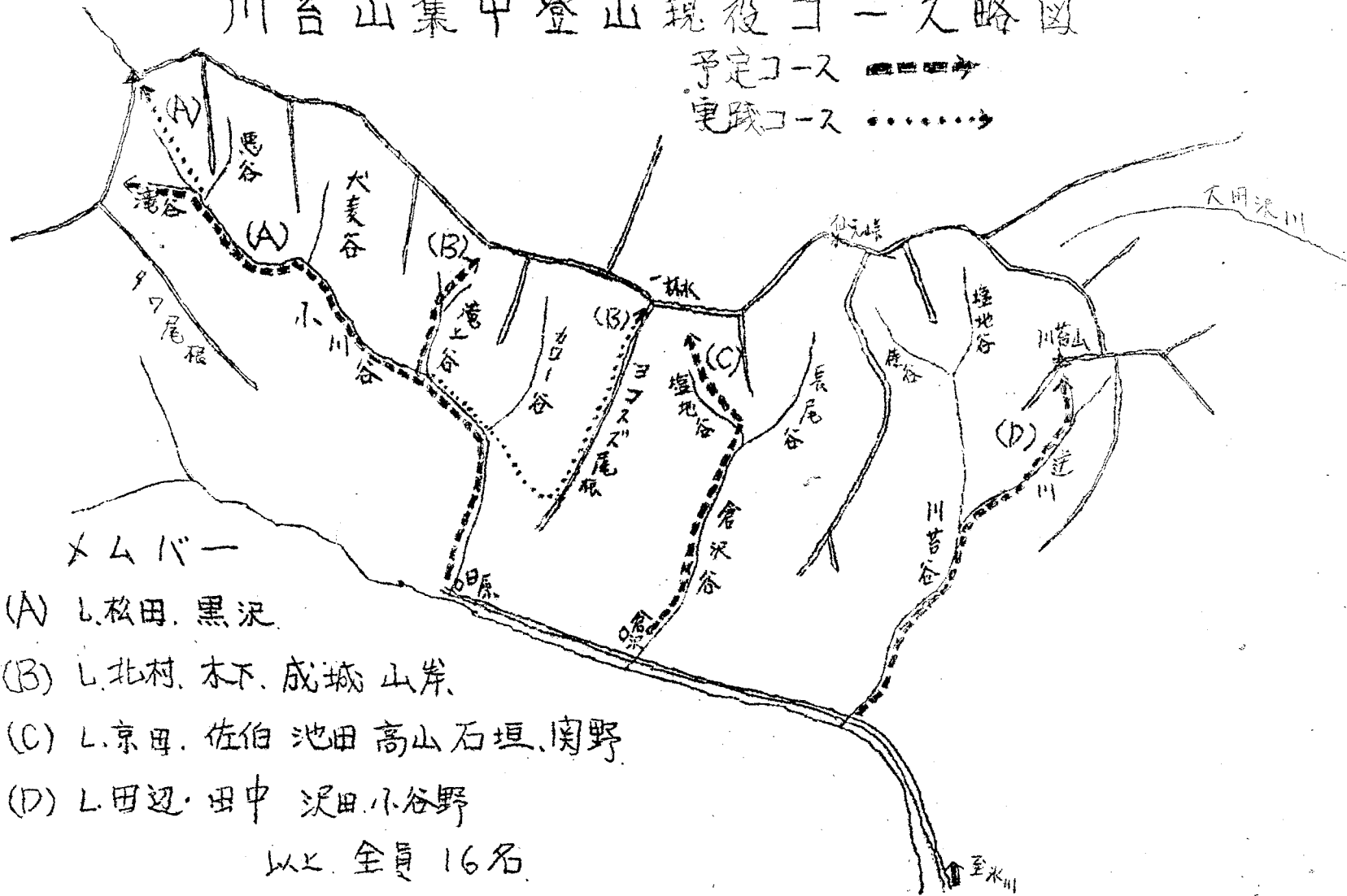
ンパンの残りを食い、富のバス停留所まで一時自と
 二十五分の記録を出す馬車でこれ又馳せ下る。

(タイム)

川上(8:40)ー梓山(9:20)ー八丁坂(11:10)ー十文字峠(12:10)ー
 (12:30)ー大山(13:15)ー武信白岩山(14:20)ー三宝山(15:30)

甲武信岳(16:08)ー小屋(16:20)ー日小屋(8:00)ー破川小屋跡
 (8:45)ー西破川(9:45)ー東破川(10:03)ー雁坂峠(10:50)ー
 雁坂峠(11:15)ー11:40)ー広瀬(14:30)ー15:00)ー三富(16:25)

川苔山集中登山現役コース一入略図



予定コース ———→
 実践コース→

Xムバー

- (A) L. 松田, 黒沢
- (B) L. 北村, 木下, 成城, 山岸
- (C) L. 京母, 佐伯, 池田, 高山, 石垣, 関野
- (D) L. 田辺, 田中, 沢田, 小谷野

以上 全員 16名

倉沢塩地谷隊報告

人員 上京田、池田、佐伯、SL高山、

タイム 石垣、奥野、倉沢出合(三〇〇) 一、二、三、四、五、六、七、八、九、十、十一、十二、十三、十四、十五、十六、十七、十八、十九、二十、二十一、二十二、二十三、二十四、二十五、二十六、二十七、二十八、二十九、三十、三十一、三十二、三十三、三十四、三十五、三十六、三十七、三十八、三十九、四十、四十一、四十二、四十三、四十四、四十五、四十六、四十七、四十八、四十九、五十、五十一、五十二、五十三、五十四、五十五、五十六、五十七、五十八、五十九、六十、六十一、六十二、六十三、六十四、六十五、六十六、六十七、六十八、六十九、七十、七十一、七十二、七十三、七十四、七十五、七十六、七十七、七十八、七十九、八十、八十一、八十二、八十三、八十四、八十五、八十六、八十七、八十八、八十九、九十、九十一、九十二、九十三、九十四、九十五、九十六、九十七、九十八、九十九、一百、

(行動) 九月二十四日 小雨 塩地谷 倉沢出合(三〇〇) 一、二、三、四、五、六、七、八、九、十、十一、十二、十三、十四、十五、十六、十七、十八、十九、二十、二十一、二十二、二十三、二十四、二十五、二十六、二十七、二十八、二十九、三十、三十一、三十二、三十三、三十四、三十五、三十六、三十七、三十八、三十九、四十、四十一、四十二、四十三、四十四、四十五、四十六、四十七、四十八、四十九、五十、五十一、五十二、五十三、五十四、五十五、五十六、五十七、五十八、五十九、六十、六十一、六十二、六十三、六十四、六十五、六十六、六十七、六十八、六十九、七十、七十一、七十二、七十三、七十四、七十五、七十六、七十七、七十八、七十九、八十、八十一、八十二、八十三、八十四、八十五、八十六、八十七、八十八、八十九、九十、九十一、九十二、九十三、九十四、九十五、九十六、九十七、九十八、九十九、一百、

塩地谷の典型的なゴルジを考す。一、二、三、四、五、六、七、八、九、十、十一、十二、十三、十四、十五、十六、十七、十八、十九、二十、二十一、二十二、二十三、二十四、二十五、二十六、二十七、二十八、二十九、三十、三十一、三十二、三十三、三十四、三十五、三十六、三十七、三十八、三十九、四十、四十一、四十二、四十三、四十四、四十五、四十六、四十七、四十八、四十九、五十、五十一、五十二、五十三、五十四、五十五、五十六、五十七、五十八、五十九、六十、六十一、六十二、六十三、六十四、六十五、六十六、六十七、六十八、六十九、七十、七十一、七十二、七十三、七十四、七十五、七十六、七十七、七十八、七十九、八十、八十一、八十二、八十三、八十四、八十五、八十六、八十七、八十八、八十九、九十、九十一、九十二、九十三、九十四、九十五、九十六、九十七、九十八、九十九、一百、

グループして水中に転落する。アクシデントが有る。Fyを除いて水線直登可能である。原流は平風とFy水量の免しい。滑状の境を最後に間もなく一杯水小屋に出た。負荷量は四貫強の者も有り悪条件をカバーして登り得たのはけのら小より。さて小屋からヨコスズ尾根に出ると滝上隊の四人に出合、た。次が単独で彼等の後を追って、いる。皆々の間に連絡がたの。緊急態勢をとり先ず稜材道に上り、トを張った。五時半から佐伯、京田は滝上谷復察と奥谷パイヤとの連絡。池田は川乗塩地谷小屋に連絡に出たが、次が0.5と悪条件にたると分り八時半諸条件が解決した。

塩地谷隊報告

人員 上京田、黒沢

(行動) 九月二十四日

まず順調に満谷(大京谷)出合につく。すこし早いが疲れたら、飯どころではなくなる。思い、昼食。出合は極く清らかな流れで、奥の悪さは一寸想像出来ない。沢なと、ちがいが人が全くいないので、気持ちがいい。数多いナメ滝をこえ、日原、西谷のつり橋の下に出る。橋のうしろのF2にみとれて、たが、一寸の目の先を見ると30Mに迫り、岩魚が五六匹、悠々と泳いでいる。幸い釣道具を捨てて、たので釣ろうとしたが失敗。岩魚は一瞬岩陰に消えた。しゃくた降ったので、手づかみで試みたが、これ。も失敗。一寸遅くなつたが、出合、F4、20Mにか、岩道のゲルンもあつた。だが、白登を試みた。左岸

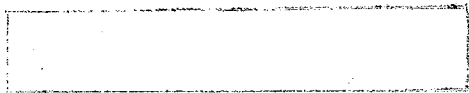
ガブルジユにかニ行れて連リ、ヌルヌルすべし路
段を昇るより感れ、大いゴルジュユから連リ行が始まる。暗くして暗い
廣に左を捲く。期行連川進行が始まる。暗くして暗い
単に左を捲く。期行連川進行が始まる。暗くして暗い
ちよろし三本の水が流れて、期行連川進行が始まる。暗くして暗い
で。荷が軽かから一時間、期行連川進行が始まる。暗くして暗い
ではお合お登るから一時間、期行連川進行が始まる。暗くして暗い
小滝帯を下る。期行連川進行が始まる。暗くして暗い
ゆるゆるの滝に出る。期行連川進行が始まる。暗くして暗い
確しすこし休憩をする。期行連川進行が始まる。暗くして暗い
た。とどろけを聞いて、期行連川進行が始まる。暗くして暗い
今日の難関の一つ。期行連川進行が始まる。暗くして暗い
にすこしトラバ入して法を導く。期行連川進行が始まる。暗くして暗い
より簡単な滝だ。期行連川進行が始まる。暗くして暗い
とはラヌバ峠に行く。期行連川進行が始まる。暗くして暗い
で。食事をとつた。期行連川進行が始まる。暗くして暗い
思、たより時間かたつて、期行連川進行が始まる。暗くして暗い
から川苔山へ行く予定を告げ、期行連川進行が始まる。暗くして暗い
ことにして出発した。期行連川進行が始まる。暗くして暗い
と20mの滝をマクする。期行連川進行が始まる。暗くして暗い
った細い滝で滑りやすい。期行連川進行が始まる。暗くして暗い
申段で水を下す。期行連川進行が始まる。暗くして暗い
入して登る。期行連川進行が始まる。暗くして暗い
長の滝がある。期行連川進行が始まる。暗くして暗い
や。息の流れる。期行連川進行が始まる。暗くして暗い
一息の流れる。期行連川進行が始まる。暗くして暗い
は。サイルをつけて登る。期行連川進行が始まる。暗くして暗い
と水で滝を流す。期行連川進行が始まる。暗くして暗い
に。掛まつて小滝帯を下る。期行連川進行が始まる。暗くして暗い

ニつ尻の小沢に入り五分位で藪ごぎになり踏跡に
つりて行く。約十五分が川苔嶺上についた。送
の都合あり。こまご三時間間四十五分が思。た
の速さだつた。人どどつたがえり川苔山頂だ
ル。小屋へ下つた。期行連川進行が始まる。暗くして暗い
てしまつた。期行連川進行が始まる。暗くして暗い
が。小屋に着いた。

今年になつて三冊目の部報が発行され今年度の
部報の係も一気つ時あとは来年の春の
字印刷まで原コウを集めるのみとつた。
さてこの第十五号は十一月発行の予定
あつたが一月早い十月に発行のはこむと
十月中旬より版下り始め下旬には印刷
始め記念祭準備の日に完了したのであつた。

部報「行律」第十五号
昭和三十年十月二十二日発行

発行所 東京都立西高山路部
形並区大宮前
三三二八
編集兼発行者 責任者
北村護行
非売品



THE HÔLÔ P. 15 1807 10 (OCTOBER, 186)